

諏訪小だより

令和5年11月30日
12月号
多摩市立諏訪小学校
校長 齋藤 幸之介

「かけがえのない自分」を見付けるために－学習発表会を控えて思うこと

先日6年生の道徳の授業を参観しました。「おじいちゃんとの約束」という教材文を基に、「かけがえのない命」について考える学習でした。学者を祖父に持つ信二は自分のことを「何のとりえもない」と自己評価し、時々落ち込むこともありましたが。ある日突然倒れた祖父は亡くなる直前、信二に「とりえが大事なんじゃない。自分の命を大切に生きる」「自分は自分らしく、精一杯生きれば、だれにも恥ことはない」、そして「生きていることこそそのものが、尊いことなんだぞ」と言い残します。生きるとはどういうことか、を自問自答する難しさに向き合おうとする6年生の姿がとても尊く見えました。

「自分は価値があるか」と問うてみると…

しかし、自分らしく生きるとは、と問われてこれに答えを見い出すのは並大抵のことではないでしょう。このことは大人でも難しいかもしれません。では、信二の祖父が言った「自分らしく」「自分の命を大切に生きる」ためにはどうしたらよいのでしょうか。

例えば、世界幸福度報告書によれば、日本は、調査に参加した137国中47位、2020年が63位であったことからすれば本年度は回復しているが、人生の選択の自由度や寛容さに課題があると指摘もされています(竹山栄太郎【世界幸福度ランキング】日本の幸福度、2023年は47位に上昇 トップは6年連続の…(2023年、SDGs ACTION The Asahi Shinbun)。一方、ユニセフの2020年の調査報告によれば、「子どもの幸福度」は調査対象国38か国中20位、精神的幸福度は37だったそうです。また、高校生に「自分は価値ある人間だと思うか」と問うたところ、「そうだ」「まあそうだ」と答えた割合は、韓国83.7%、アメリカ合衆国83.9%、中国80.2%に比べて日本は44.9%と低い、とのデータも出ています。他のデータを踏まえながら、明石要一さんは、自己肯定感は向上はしているが、「まだまだの感はある」と評価しています。そして、これを改善するためには、親、教師、それから友達との関係の濃密さに着目しています(「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－」、国立青少年教育振興機構 2018年)。

「かけがえのない自分」を大切にするために

昨年の3月、私は卒業式の式辞で「かけがえのない自分」についてお話をしています。ここで私は「かけがえのない自分」に「自己肯定感」の意味を込めたつもりです。子供たち一人一人は、唯一無二でかけがえのない存在、つまり代わりがない、と伝えました。そして、試しては失敗する、試行錯誤をするという自由が与えられている、と続けました。信二の祖父が言う、「とりえ」ではなく「自分らしく精一杯」生きることにつながる、と改めて思っています。

そのために必要なことがあります。このことを、都立大学教授 宮台真司先生の御言葉を借りながら、私は以下のことを伝えました。「試行錯誤できる自由を支えてくれるのは、このことを認めてくれる保護者や家族、もちろん教職員がいるからであります」。「大丈夫」「次がある」「他のチャレンジがある」と子供たちの存在を認める人々が大切であることを改めて確認をしたいと思います。冒頭に御紹介をした信二の祖父は亡くなってしまいましたが、まさしく、信二の存在をかけがえがないことを深く捉え、そして認め、励ましていました。

学習発表会に向けて

話が遠回りをしたかもしれません。すみません。

学校では、多くの教科、道徳、そして特別活動と様々な内容を提供すべく多様な活動を子供たちに提供しています。そこには得手不得手もありましょう。確かに、信二のように「自分にはとりえが」などと悩む場合もあります。しかし、だからこそ、そこで私共は、子供たちの存在を励まししながら進んでいきたいと考えています。

学習発表会も教育活動の一環ですから、子供たちが、これを通して「自分らしさ」に気付き、そして「精一杯取り組む素晴らしさ」を味わうようにしたいと思います。保護者並びに御家族の皆様、そして地域の方々には、口幅ったくもありませんが今私が述べたことを頭の片隅に置いていただきながら、子供たちに賞賛の拍手と御言葉を頂戴できればと思います。

当日体育館にてお待ち申し上げます。

<参考>「14歳からの社会学－これからの社会を生きる君に」

(宮台真司 2013年 筑摩書房)

